

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079

振替 東京0-58431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

私鉄が五年ぶりにストライキ

2

社会通信社 シンポジウム(三月九日)報告(二)

国鉄「分割・民営化」は阻止できる!

国鉄闘争の焦点(3)

小島 忠夫

3

シンポジウム まとめ

ゲリラ戦には正規兵が必要 坂牛 哲郎

12

国鉄「分割・民営化」阻止の条件

— 国鉄情勢をめぐる新たな情勢 —

14

京都総評と「革新京都」の灯を残すために

— 京都府知事選の意味するもの —

16

連載 『資本論』第一巻を読む 第23回

商品の物神的性格(二)

20

編集部だより

19

# 旬刊 社会通信

NO.299

一九八六年五月二日

一九八六年五月二日発行

(毎月一日・二日・三日発行)

## ■巻頭言■

## 私鉄が五年ぶりにストライキ

私鉄が五年ぶりにストライキに入った。といっても早朝の六時一五分までのストライキで朝のラッシュ時には、ほぼ平常ダイヤにもどっていたのでひところの交運共闘を中心とした音の出るストライキには程遠い。

このストライキをめぐるさまざまなことがいわれているが一番あわてたのは民鉄協とマスコミだろう。

テレビ局はテロップで「スト中止」と流し続けたのを消してしまえば誤報について知らん顔もできるが新聞は朝刊で「私鉄五年連続のストなし春闘」と書いてしまった、このミスは永久に残る。したがって夕刊では自分のミスを私鉄労資関係のゴタゴタに置きかえるために懸命だった。

民鉄協もストライキに入らない前提で最終回答をしたのにストライキに入ってしまった。「一年間だまされて来た」とNHKにしゃべった田村書記長に、民鉄協はだまされたと思ったことだろう。

それではあのストライキはなんであったのだろう。ここに今後の労働運動の展望を見出すカギがありはしないか。

総連三役の妥結案に対して中闘委で意見の出たことはこれまでもあった。しかしこれまでには三役の強い指導性でこれらの意見を説得してストライキを中止して妥結案を職場討議へ下して来た。

今回なぜこれができなかったか。四年連続のストなし低額妥結に職場では強い不満がうずまき、今年こそストライキの中で解決しようとの私鉄総連への激励行動は近年になく激しかった。

組合員は自分たちの出番のない春闘にアキアキして本来は資本へ向うべき不満を労働組合の幹部へ向け始めていた。

これらの組合員の動きを良心的幹部や少しでも先を読める幹部は敏感に感じ取り、三役のストなし低額妥結案に対して中闘委が近年になく荒れた。

結果だけ見れば「ガスぬきスト」とも見えないことはない。しかし今後の労資関係を全労協を中心とした労資協調路線の定着にかける指導部に見れば、どんな形であれ私鉄がストライキに入ることは大きなつまずきであった。

短時間のストライキの中で始めて労働組合の力で電車が止ったことを実感した青年労働者たちは、やっぱり我々が主人公なのだということを学習会の中だけでなく事実をもって知ることができた。

全国で大手と中小が同時にストライキに入ったのは七年ぶりだった。「どうせやっても同じだよ」の声は、「やればやるだけのことはあるなあ」に変わり始めている。

今年の私鉄ストライキは単なるハプニングではない。歴史が動き始める時には常にこの種のことはあるものだ。「偶然性の中の必然性」と誰れかが言った。

歴史を切り開く任務を持つ我々は今年形となって現われた努力の結果を、さらに来年に向けて発展させるか、資本の力で圧殺させられるか、もう次の闘いは始まっている。

(松原 広)

## 社会通信社シンポジウム(三月九日)報告(二)

## 国鉄「分割・民営化」は阻止できる

国鉄闘争の焦点(3)

国労東京施設支部副委員長 小島 忠 夫

## 国鉄闘争勝利への戦略・戦術

今までずっと分会長をやっておりましたが、ことしから東京施設支部の副委員長になっております。こういうところで問題を提起するほど活動しているわけではないし、理論的に深まっているわけではないので、議論も乱暴になるかもしれませんし、情勢分析の中にも誤りがあると思います。ぜひ後の討論の中で補強していただきたいと思えます。

国鉄「分割・民営化」に勝てると思っていたが

私はこの間東京の新宿で地域共闘を中心をやってきたわけです。分会の運動ももちろんやってきましたが、主に地域活動をやってきて、一昨年の国鉄労働者の「支援共闘会議」をつくる準備段階から運動にかかわって、今「東京会議」の事務局を担当させていただいてます。それまでは、職場の中でずっとやっていたら今度のたたかいかも何とかなるのではないかと感じていたし、新宿でやっていた場合は地域共闘もたいへん広がっており、東京地本の下にある西部ブロックの中でも国鉄の問題はたいへん浸透していた。草の根の運動とか婦人のグループにもほくらに声がかかって国鉄問題を話したり、たいへん運動が広がっているということ、このたたかいは勝てるのではないかと昨年から思っていたわけです。しかし、それは新宿を中心にしたかなりローカルな問題で、全体の問題はぜんぜんわからなかったのですが、新宿の「支援共闘会議」が「東京会議」をつくろうということ、東京地本との接触や本部との接触などをしていくうちに、このままいくと明らかに国鉄闘争は負けちゃうという感じを強く持ったわけです。

指導のあり方に危機感

なぜかと言うと、本部の人たち何人かと話したのですが、「もう勝てない」という雰囲気が出ています。もうだめなんではないか。ほくらを支援しているある人は、上の偉い人から「いくら国労支援をやってみてももう筋書きはでき上がっているから、手を引いた方がいい」と言われたというのです。職場の中では毎回「がんばれば必ず勝てる!」と言ってきたのですが、この間やってきてこれは負けるのではないかと感じを強く持ったのです。そしてこれではいけないということ、力量を超えているのですが、一生懸命がんばろうということ、東京会議のことを今やっているところ、

現状が今どうなっているかを流れを追ってみると、職場の人たちが今たいへん動揺しているわけです。とくにほくららの職場は派遣が出ていて、たいへん強力に当局から肩たたきがされるから、たいへん動揺する。この間振り返ってみると、五九・ニダイヤ改正で「余剰人員」が出て、例の三項目が出てきたわけです。それにたいして国労が事実上の首切りだということ、反対をせずにきた。そして昨年四月いろいろ理屈をつけて三項目を協定化をする。しかし出向や派遣には応じない、あるいは休まないという三つの運動を東京地本が提起したものを国労本部もやっていたというふうにしてきたわけです。ところが

昨年十一月になって三ない運動もやめようとなってきた。ことしになって百四十五回中央委員会では希望退職を認めるところまではいっていないが、認める前提に立った方針が出されてきているわけです。二月二十三日に出ていましたが、政労協の大会で「余剰人員は受け入れない」という修正案が通ったと書いてありましたが、国労本部の役員は各単産を回って、これは総評と動労と一緒にやっているのですが、余剰人員を引き受けてくださいとお願ひして回っているのが今日の状況なわけです。

こういう状況から、今の本部方針に従っていけば必ずこれは負ける。単に負けるのではなくて九万三千の首切りにいくとたいへん危機感を持つわけです。

#### たよりにならない社会党、総評

社会党は国鉄改革案を出しました。全国ネットワーク、民営化手法を取り入れるが民営化ではないと言っているが、じつは三割の株は民間に払い下げるわけです。あの一番の問題点は何かというところ、十六兆七千億の借金がどうなるかという問題にはふれていない。社会党の民営化案でいけば必ず十六兆七千億の借金は国が責任を持ってとなるわけです。国が責任を持つということになれば、ただちにそれは増税に結びついていく。

もう一つ余剰人員の問題についても、国の責任でやれとならざるをえないわけです。ですから最近の総評の動きとか社会党の動きを見ると、余剰人員の問題が焦点に座ってきているわけです。余剰人員の問題が解決しなければ社会党案ですら通らないというのが社会党案の中身なわけです。

情勢はたいへん変わってきているが、しかしその中心に座っているところ、ただかう主体がそうなっているというところには一番問題があると思うんです。そういうふうにはくは下から見ていて強く感じるわけです。たとえば国労本部が最近やったアンケートの問題でもそうです。具体的な方針を出し切っていないのが内容です。そういう意味で全体的な情勢は好転しているが、しかしわが主体性の問題からいけば決定的にまずい状況にあるのが今日の状況だと思うんです。

#### 敵のネライは国労つぶし

今度の国労攻撃の問題点は、皆さんが言っているからおわかりと思いますが、やはり国労つぶしだということがはっきりしていると思うんです。このことをもう一回議論をする必要があると思う。国労つぶしと国鉄資産の分捕り、偽装倒産はそういうものを含むのだと言っていますが、その通りだと思うんです。今度の九法案の中身を見ると、余剰人員の問題だけ見てもそのことがはっきりしている。一回全員が旧会社に移って、そして新しい会社で再雇用するとなっている。これは前から日経連やサンケイ新聞が、一回全員解雇をしてそして選別再雇用すると言っていたことが、今度の法案の閣議決定の中にちゃんと入っている。しかも今回はスト権を与えようとしている。電通の民営化のときにはたいへんもめて、結局は三年後にスト権を檢討するとなっていると思うんですが、国鉄の場合は「分割・民営」後直ちにスト権を与える。そして全員旧清算会社に行った後再雇用するとなっていることがはっきりしていると思うんです。現に国鉄内部ではっきり言っていることは、いわゆる共産党系と協会派と言われる人たちは全部首を切るのだと、本社の総裁室長になった井出が公然と言っているわけです。

ですから今度のねらいはやはり活動家ページ、国労の体質を変えて国労の内部にいる左派的な活動を全部首を切る、これが今度の攻撃の一番のもつとだろろうと思います。国鉄内部から見ているとそれを強く感じるわけです。

お手元にお配りした新聞の中に、マスコミに出たもので国労問題、労働問題でとらえているところを抜粋して出したのですが、こんなにあるわけです。やはり国鉄の問題は労働問題だと見て間違いがないし、それほど中曽根や財界は必死に国労をつぶさなければいけないという立場で攻撃を仕掛けていると思うんです。

そういう意味で今度のたたかいは決してぼくらが途中で妥協ができるという問題ではないし、最後までこちらが勝利するまでたたかひ抜かないとパッサリやられる、という事態になるのではないかと考えているわけです。

### 「行革」は日露戦争以来の大戦争

向こう側が考えているのは、行革で大掃除をして新しい憲法を安置をすること。むこうは憲法改正、ファシズムを頭において国鉄の問題、あるいは行革の問題、あるいは社会党のニュー宣言もそうだし労働「統一」の問題もそうですが、全部頭をそこに置いてすべての戦略戦術が立てられている。一つは行革は日露戦争以来の大戦争だと位置づけています。それから世論はつくるものだと言っています。憲法は、ただたんにできるのではなくて、憲法を変える力が先にあると言っています。ぼくらが今まで職場闘争のときに言ってきたのは、協定があつて職場闘争ができるのではなくて、たたかう力があつて初めてそれが協定化されるのだと言ってきたのですが、彼らもまったく同じく運動論のなかでそういうふうに位置づけている。

今度の国労攻撃を見ていると、こういうやり方は明らかにファシズムのやり方だと思うのですが、「分割・民営」の法案が出ていない前から「分割・民営」を前提にしてすべて物事が進んでいるわけです。職場の攻撃もしかりです。元気が出るという問題もそうです。アンケートもそうです。法案が通る前に既成事実を積み上げて、その上に後から法律がつくられる。これは彼らの戦略なわけです。今までみたいにもうこうから法案が出てくると何か提案があるというふうに待っていると、今度のたたかいはたたかえないことを物語っていると思います。ぼくらが下からたたかひをつくっていかなければ運動をつくることはできない。総評や上からの提起が来るのを待っていれば運動はつくれないことをはつきり物語っていると思います。

同時に、この問題は裏から見れば彼らの弱さの現われです。資本主義の矛盾が高まっていること。中曽根三選問題と深く関わっていること。ある意味で八七年四月実施というのは、ギリギリのスケジュールだけに一歩まちがえると法案が吹っ飛ばことになりかねないだけに既成事実を積み上げる必要があるのだと思うのです。

そういう意味で向こう側はたいへん階級的に国鉄の問題をとらえて、どんどん既成事実を積み重ねていく。このやり方は満州事変を起し、上海事変を起し、それを後から議会が承認して予算をつけていくのとまったく同じやり方が今度の攻撃だと思わなければなりません。そういう攻撃のやり方は明らかにファシズムですし、ですからこのたたかひは国鉄労働者だけのたたかひではなく、日本の平和と民主主義の問題だというふうにもっと幅広い戦線をつくる必要があると感じるわけです。

### 労戦、ニュー社会党、「行革」は一体

今度の国鉄の問題は「全民労協路線の問題」と、「ニュー社会党路線」、それから「行革」、この三つを一本の柱として彼らは組み立てて、それぞれ攻撃を加えているのが今日の状況だと思えます。ですから私たちも三つを一つの問題としてとらえて、国鉄問題を国鉄問題としてとらえるのではなくて右翼的労戦再編、「行革」の問題、「社会党強化」の問題と

あわせて運動をつくるのがポイントだと思っんです。

この三つのうちたとえば国鉄問題で大衆的に問題が暴露されて運動が広がれば、全労協が進めようとする右翼的統一は吹っ飛ぶと思っんです。あるいは社会党の路線をもう一回左に巻き返すことができると思っんです。そういう意味では地域に行っつねに国鉄問題を応援してくれと言っわけですが、それは国鉄の問題を応援することが全労協路線をとめることだし、社会党の右傾化をとめることだと言っふうにはくは今まで訴えてきたし、そのように感じているところでは。

#### 機関は大事に、だがあてにせず

そういう状況の中でこれから反撃していくわけですが、その条件はいっぱいある。敵の弱点もいっぱいあるし、情勢は明らかに変わっつてきていると思っんです。牛久保先生が言っつたように、自民党内部の動き、マスコミの動き、いろいろなところで情勢は変わっつてきていると思っんです。問題はその変わっつてきた情勢に合わせた運動をどうつくるかということです。既成の運動、組織があるわけでは。たとえば東京地評があり、総評があり、国労本部があり、社会党がある。既成の組織がちゃんとつくられているわけでは。そこにたいする幻想がどうしてもある。たとえば東京会議をなせつくるんだ、新宿で支援共闘会議をなせつくるんだという疑問がある。新宿地区労や東京地評、総評が国鉄問題を全力をあげてたかとういうのでしたら、ぼくらは何も東京会議を努力してつくる必要はないし、あるいは地域の支援共闘会議を無数につくる必要はないのです。現に組織があるわけでは。

問題は、総評も地域の労働組合も、今度の問題は国労、動労の対立が内部に持ち込まれている。同時に総評の人や上の人たちは今度の国労闘争が盛り上げれば全労協路線が吹っ飛ぶことをよく知っつている。社会党だつて一番上で絵をかいている人は、国労闘争が大衆的に盛り上げつて私たちのたかいた勝利する状況になれば、社会党が右旋回をする動きがとまることを感じているから、上は運動の提起がないわけでは。国鉄内部の運動がまとまっつていないじゃないか。もつと内部で調整しろと言っつて声が出てくる。動労ともつと話し合え、と言っつてくるわけでは。しかし動労と話し合っつてみたところで結論が出ないのを知っつているわけでは。それを知つた上で彼らはやっつてくる。だから総評が動かない、地評、県評も動けなくなるのが今日の状況では。総評のなかにも地評のなかにも地区労の中にも、やらなければならぬという人たちはいっぱいいるんです。しかしそのなかでは動労との関係が議論になっつて、その組織が動かないのが今日の状況だと思っつんです。

ぼくらは新宿で経験をしてきました。新宿地区労の内部も社会党、共産党系の対立がたへん強い。それで国労問題をやっつてくれと言っつても運動が進まない。すべてが内部の対立に消化をされて、何ら運動がつかれない。そういうなかで攻撃だけが強まっつてくるものから、やっぱりつくらざるを得ないと言っつて、新宿の「国鉄労働者支援共闘会議」がつくられたわけでは。「東京会議」もまっつたく同じでは。

ですから下部活動家が今考えなければいけないことは、既成の組織の限界だ。決して相手にしないと言っつていいことではない。一部そういう敵みたいな人たちがいると運動が回らないと言っつのが、今の地域共闘の組織の現状だと思っつんです。ですからぼくらは運動を下からつくり上げて、そういうなかで地域の共闘の組織を動かすと言っつか、実際にがんばっつてもらっつるようにしなければならぬ。頭の切りかえと言っつか、そこをやらなければいけない。

今までやっつてきた運動の中で党派闘争の問題でもいろいろな対立があっつて、なかなか

まくいかないことありますが、しかし今日の情勢はそれを許さないのではないかとぼくは思っています。新宿の地区ではそういうことをやってきて、いま東京会議でもやっているところですよ。

かつて、一九四六年に九万人の首切り提案がありました。これはゼネストで全面撤回をさせる。三年後の四九年に定員法として十万人の首切り法案が成立、国労は熱海での中央委員会でストを含む実力闘争を決めるわけです。しかし、下山事件などの謀略事件がおきます。国鉄当局は、共産党系の委員長を含む中闘を解雇、このことをきっかけに民同と対立してたたかひのないまま、十万人の首切りが実行されるわけです。そして五〇年にレッドパーズ、翌五一年に朝鮮戦争へと進むわけです。それを今回の教訓としなければならぬと思います。

### 反撃の条件はいっぱいある

今度の問題で反撃の条件はいっぱいありますが、一つは何と言っても五千万署名です。それから国鉄労働者のがんばりです。四年間これだけたたかれてきて、なおかつ立席点呼だとか着かえ時間だとか細かい職場のたたかひをがんばり抜いている。こういうのは民間の会社では考えられないわけです。

先日、鷹取工場の人たちと話をしてみました。牛久保先生と二人で行って来たんです。鷹取工場ではことし一年間でこれまでの三十年間の処分を上回ったと言っています。千三百人位の組合員のうち二千近い処分が一年間に出了たそうです。ぼくは言ったのですが、普通の会社でそれだけ処分が出たら、たいてい組合執行部は分裂して、三十人ぐらいが争議団でがんばっているんじゃないですかと。それぐらい国鉄の職場は踏ん張っていると思うんです。郡山でもたいへんな処分が出ましたが、しかし、ああいう処分をいまごろになっても出すほどがんばっているところに国鉄労働者の持つエネルギーがあります。ぼくは現業のたたかひを見ていて、そのことを強く感じているわけです。

ですから条件はもうつくられていると思います。マスコミの問題、自民党内部の動き、地交線廃止に反対する動き、首切りに反対する運動、ファシズム、いろんなところですべての条件はほくはつくられていると思うんです。

### 最大の弱点は雇用問題

そこまで今条件はつくられていて、向こうの一番の弱点は何かと言えば、余剰人員対策だと思っています。この余剰人員対策がうまくいけば首切りはできると思うんです。総評の運動を見ているとわかるのですが、雇用を守る、組織を守るといのが最近前に出てきている。雇用を守るといのは、国鉄の職場で残るといことではなくて、国鉄から外に出して、民間の企業、あるいは下請の企業に行つて雇用を守るといことだと思っんです。

むこうの弱点は一番は何といつても九万三千人の首切りだと思っんです。新宿の支援共闘会議でやっていったときに、代表委員の小島成一先生が言つていたのですが、今度の国鉄問題は組合が反対すれば絶対負けないたたかひだと、一昨年から言つていたんです。今度の問題は国労がちゃんと首切りを認めないという基本的な方針さえ堅持すれば、九万三千人の首は絶対切れない、と言つていたんです。裏返して言えば、むこう側は国労が首切りを認めるといのか、希望退職などを認める方向に追い込んでくるということを言つたと思っんです。流れをみてみると、やっぱり国労もむこうが考えていた九万三千人を首切るには動労のように組合を巻き込まなければできない、この路線にドットと入つてきていることは間違いない。



ほからが職場のなかで派遣の問題にずいぶん反対したときに、組合的じゃない人がねらわれた。どちらかというところを批判していた人がねらわれたわけです。それにたいして活動家は、「あいつはいつも組合批判だから行っちゃっていいじゃないか」と言っただが、ぼくが言ったのはそうじゃなくて、一番組合に批判的な人を守れないと、むこうの本当のねらいは活動家をねらっているわけだから、だんだん裸にされて、活動家が裸で残った場合には指名解雇だ、沖電気の例のように希望退職がずっと進んでいった後に指名解雇が出る。派遣をとめること、どんなに組合に批判的な人でも派遣をとめるために全力をあげる。活動家の首切りを守ることだ、そういうふうにはずと行ってきただけです。

今度の余剰人員対策がもう少しいけば、たとえば希望退職がうまくいく、あるいは官公庁で今やっていることがうまく進んでいけばその後には四万一千人の指名解雇があると思んです。そういう意味で今、国労本部がとっている態度は決定的にまずい状態だと思んです。

そのことでは今自民党内でもずいぶん言っているんです。一昨年の秋、金丸が談話をに出している。いわゆる余剰人員対策を解決することが成功すればゼネストは起こらないと、一昨年の段階で新聞で言っていたんです。フィリピン問題で中曽根が財界に言ったというのが小さくなくなっちゃいましたが、フィリピン問題がなければ一面トップにどかっと中曽根首相が財界の四団体のところひ行って、余剰人員を取ってくれというのが出るはずだったんです。やはり余剰人員問題が解決しない限りは今度の国鉄問題の解決はたへん難しい。総評と言えども社会党と言えども国労本部と言えども何とかここはたたかわざるを得ない、そういう状況にあると思うんです。余剰人員の問題が一番の弱さです。

#### 債務、土地も大きな弱点

それから債務の問題、土地問題、これは社会的な問題になっている問題です。それから地方交通線の問題、あるいは安全の問題、もう弱さばかりなんです。この弱さを暴露しなければならぬわけです。ところがこのことをちゃんと暴露し切っていない。土地の問題は東京会議の人たち、牛久保先生たちが中心になって運動をつくってきたわけですが、ほからがやったバスツアーが今の問題を生んでいると思うんです。朝日新聞が二月三日に書いて以降あらゆる週刊誌、月刊誌が書いています。とくに今月号では「現代」「寶石」「潮」ですべて国鉄の問題が書かれています。いっせいにマスコミは土地問題に入っている。だれが火をつけたかというところ、東京会議が中心になったバスツアーです。「週刊現代」「朝日ジャーナル」に出ている写真はほからがやったバスツアーの写真です。あそこに来ていたジャーナリストが書いたんですね。しかも国会で田辺書記長がやったことであつてたいへんわかりやすくなったわけです。

国労本部が社会党に対して国会でやってほしいとレクチュアをしているのですが、その中心は多賀谷議員だったんですが、内容を聞くと、やることは貨物の問題、三島基金の問題、余剰人員の問題です。貨物がこれでは経営が成り立たないではないかという議論とか、あるいは三島基金が一兆円では成り立たないのではないか。考え方はそういうことをつづいて監理委員会の答申を砕砕しようと考えている。そのことは重要ですが、しかしこれでは国民的な、あるいはほからが職場にいてもぜんぜん共感を得るような内容になっていない。貨物会社ももうかるかもわからないか、国鉄労働者ならだれでもわかることだし、それが新聞に出たところで、あつたいへんな事態なんだな、となる問題ではないだろうと思つておられます。それよりか、「分割・民営」された後安全がどうなるか、地価評価の問題とかもつと国民にわかりやすい問題を国会の場ではやっていただかなければならないのに、現実に



は国労本部の国会対策はそういうふうになつてゐるわけです。たいへん有利な状況を持ちながらも、一方ではそういう状況があるわけです。

#### 下から運動をつくる

やっぱり下からの運動をつくる以外にもうないと思うんです。上の人だつて一生懸命やつてゐる人はたくさんいますけれども、やっぱり全体の流れに流されてゐると思うんです。ほくらがずつとやつてきたことは、今度のたたかいは絶対に勝てると思つて活動家と思われない限りは負けると思ひます。外野席や観客が盛り上がつていても、ピッチャーやキャッチャーや監督が動揺してゐたのでは勝てないわけです。その人たちが負けると思つてゐたのでは勝てない。今の状況はそういう状況だと思います。

#### たたかう指令部をつくる

ほくは野球のことはよく知らないのですが、野球の選手と話したら、空振り三振も見送り三振も同じだと思つてゐたのですが、見送り三振はいけない、空振り三振、振つていくことが大事だと言われたんです。今は打てば当たる時期になつてきてゐるんです。野球でピッチャーを変えるときというのはピッチャーの目を見ればわかるんだそうです。目が動揺する。心が動揺したときは、いくら技術があつても生きないんだそうです。ほくは露骨な言い方をしたくはありませんが、しかし、動揺しちゃつた幹部はかえなければならぬというのには当然で、野球でもそんなんです。労働運動は階級戦ですから、もちろんなんです。

ほくは戦争の本をよく読むんですが、スターリンググラードのたたかひのときにヂューコフ將軍というのが新たに行くわけです。前の將軍はもう動揺しちゃつていて厳しいたたかひのなかで使ひものにならない。そこでヂューコフ將軍が行つてドイツ軍を打ち破つて、最後のベルリン入城はヂューコフ將軍の第八親衛軍が入城して行くわけです。ヂューコフ將軍が戦場に行つて一番先にやつたのは、参謀本部を後ろから一番前に持つてくる。前線の弾が飛んでくるところに持つてゐた。そして前線の將兵を激励するわけです。参謀本部の人たちが將軍に逃げろ逃げろと言つてゐるのですが、逃げない。瓦てのなかにゐる。いつも將軍が一番前にゐる。敵の戦車の見えるところまでゐる。

今、国鉄の状況もそういう状況なんです。しかし、えらい人は正直なところ一番後ろにゐるんですよ(笑)。まずいんです。だれが前に出るか、それはほくらが出るしかないんです。分会の委員長とか分会の活動家だからといつて遠慮してゐてはいけません。ほくもずつと遠慮してゐたんです。「東京会議」なんてそんな大それたことはできないと思つてゐたんです。しかしここまで来たならやらなければしょうがないと感じたんです。戦場のたたかひたいへんがんばつてたつたかつてゐます。

#### 戦略目標から戦場をみる

しかし今度の国鉄の全体のたたかひの戦略目標から戦場のたたかひを見なければいけません。今まではほくらが戦場のなかにいて戦場の問題だけを見てゐて、あるいは新宿地区の運動だけを見てゐたのです。やっぱり全体の戦略のなから戦場を見て、新宿の地域の活動を今度の国鉄闘争を勝利するという前提で見ると必要があると思ひます。運動の組み立てをそういうところから、全体から見ると必要があるのではないかと思ひます。

ほくはいつも戦場のなかで言うのですが、いろいろな攻撃があつたらその裏側を見ろ。たとえば郡山でああいう攻撃が来ている。あるいは戦場のなかでめちやくちやな攻撃が来

ている。なぜここまで来てやるのだろうかという問題です。むこう側に本当に力があつたら何もそういうことはしないとと思うんです。ワッペンをつけたって何だって構わない、やらせればいい、そして来年は希望退職をどんどん行う、四万一千人の首を切れるというふうに自信があれば、何も職場のなかで一々立席点呼だとか着がえ時間がどうのこうのという問題をやる必要はないのです。

しかし彼らはそれをやらなければ首が切れないと見ているのです。必ず立ち上がってスライキが起きると見ているのです。職場の問題は攻撃でたいへん押し込まれているように見えます、職場の活動家も押し込まれているように見えますが、そうではなくて、じつはむこうはそれをやらないと今度の改革案はできないんだ。そこなんです。そういうふうにして常にぼくらは向こう側の立場に立って、当局側の立場、独占資本の立場に立って職場の問題を見る。あるいはわが方の司令官になったつもりで職場の運動を見る、そういう幅を広げることが今求められていると思うんです。そういう立場で具体的にこれからの運動をしなければならぬと思うのです。

#### 流れを変えるために

当面ぼくの問題意識で言うと、今までの国労の動きは、ずっと左派の人たちががんばってきたけれども、やはり当局ベースで来ている。臨雇の首切りに始まって三項目が出てきて、今度は希望退職、そして指名解雇と続くわけですけども、向こう側の戦略目標からまだ外れていないんです。多少行ったり来たりはしていますけれども、将棋で言えば手筋に入っているんです。この手筋を変えなければならぬと思うんです。むこうが立ててきた手筋の本番は希望退職と社会党案だと思っただけです。むこうはこれが今度の勝負です。希望退職をのむかあるいは社会党案をのむか、これはむこう側の戦略目標だと思います。これを絶対にとめなければならぬというのがぼくらの当面の戦略目標でなければならぬと思うのです。

社会党案は、よく見えますけれども、さっき言ったように債務の問題、増税の問題、首切りの問題、ここに落とし穴があるんです。国労本部は「分割・民営」反対、社会党は民営化やむなしとなっている。しかしこの路線は両方がそのまま進んでいくことはない。どこかで調整しなければならぬ時期に必ずきます。それが今度の中央委員会か、近い時期にぼくは来ると思うんです。このときにわれわれの態度はかなり重要だと思っただけです。社会党の場合ニュー宣伝が踏み絵で、むこう側で言うルビコン川だと思っただけです。国労の場合も必ずここが来る。希望退職と、社会党案をのむかのまじか、ここをとめるか決めないかが勝負だと思っただけです。うわさによると三月一七日一八日の中央委員会がそれだと言われています。最近の話だといやそれはなくなつたとも言われており、わかりません。しかし国労が「分割・民営」反対で進んでいく、社会党が分割反対、「民営化」やむなしでいく。こういう矛盾はありえない。どこかでぶつからざるをえない。総評の方針も社会党を支持するとなつていいるから、必ずここで矛盾が出るんです。ここにとらばくらは全力を集中してこれを阻止することが必要だと思っただけです。

その意味では、中央委員会ががんばるだけではだめだと思っただけです。左派のグループは今まで中央委員会ががんばってきた、あるいは全国大会で何回もがんばってきた。がんばってきたけれども、やっぱり流れは変わっていないんです。路線に組み込まれているんです。ですから今までと違ったアクションをこちらが起こさなければならぬ。

## 「原対協」のようにたたかう

そういう意味では何といつても原対協がやったように、全国の地域の職場の活動家、こを結集させて中央委員会対策をバッチリやることだと思います。そして司令官が後ろをむいたときには司令官を変えらるる必要がどうしてでもどこかで出てくると思います。あるいは司令官がこっちにもどってくるときももちろんあるわけです。下の大衆運動がガツと盛り上がりつつこれは勝てるようになったときにもどってきます(笑)。司令官というのはこのどっちかしかないんです。新しい司令官をつくるか、司令官がこっちにくるような運動をつくり上げるか、この一つだと思っんです。そういう意味で議論はたいへん乱暴ですが、そういう状況をつくらなければいけない。

そしてこの前の二・二六集会、三〇〇〇人の集会ですから一般的に言えば小さな集会です。しかし中身はたいへん盛り上がった。あのことが社会党内部にも総評内部にも今いろいろな影響を与えているわけです。今度東京会議が三月二五日に日比野音で一〇〇〇〇人集会をやるうとしてるわけです。これらの大衆運動が積み重ねられていけば、大衆運動の流れは一遍に変わっていくと思っんです。必ずそうなると思っんです。それはもう条件があるからなんです。

そういう意味でぼくの言っただのはたいへん乱暴であるいは希望的観測が多いかもしれませんが、ぼくがここ半年間やった経験で、ぼくの力量ではもうできないような運動がぼくらのところに持ち込まれてるわけです。たとえばペ平連が昔あって、今は「日本はこれでいいのか市民連合」というところがあるんですが、ここは政治問題が中心ですが、国鉄問題をやるうとしてることでぼくも一月に学習会に呼ばれて話をしてみました、それがパンフレットになって、そしてバスツアーにもきました。今、井上ひさしさんと呼んで集会をやると言っっています。また「これでいいのか市民連合」は市民の立場から国鉄問題を監視しようということ、鉄道債権というのを一人一〇〇〇〇円で売って、その資金をもとに、昔、田中角栄のときに「週刊ピーナツ」というのが出ましたが、あれと同じようなミニコミ誌をつくって国鉄を食いものにさせるなというのをつくろうと言っっています。

また、わりと右の人たちも全く同じような考え方で、国鉄の用地の問題などで国鉄を中曾根の食いものにさせないという立場で市民運動をつくらうとしてるわけです。かつない広がりが増えてると思っんです。

職場だけの問題を見たいへん運動が見えなくなりまますけれども、一歩外から自分の職場の問題、地域の問題を見渡せば、必ず勝利の展望はできてくる。私も一時もうだめなんじゃないかと思っったんですが、最近絶対勝てるなという気になっっているので、ぜひとも各地で一人ひとりの活動家ががんばれば国鉄「分割・民営化」には勝利できると思っんです。(拍手)

## シンポジウム・まとめ ゲリラ戦には正規兵が必要

前都高教委員長 坂牛哲郎

まとめというか私を感じていることを申し上げたいと思います。

### 「行革」のネライは憲法改悪

きょう三人の問題提起者を初めとして皆さんのお話を聞いて、たしかな手ごたえは感じています。しかしたいへんな危機感はぬぐい切れません。危機感というのは国労の問題というよりも自分自身の危機感です。日教組は今まで国労と手を握って闘ってきましたが、現在臨教審の攻撃でこのままいったら日教組は六〇万人中、二〇万人の首切りに直面する状態になります。国労がこのままつぶれていくような状態になったら、確実に日教組は二〇万人は切られる。そうなったら総評は必ずつぶれていく。私も三〇数年総評といっしょにたたかってまいりましたので、そういう危機感を感じております。

行政改革は八一年に発足して、八三年に基本答申が出ましたが、あの段階ではまだ国労の中央幹部は、これだけすさまじい攻撃がくるとは感じていなかったように思われます。まさかという感じがあった。実際問題は出ていたわけですが、敵の考えは、八一年から八三年までの行政改革の推移を見たら非常に明らかです。国労にたいする集中砲火とともに、八二年に全民労協が発足した。ようするに行政改革というのは明らかに日本の憲法改悪をして軍事国家に持つていくための総評解体であり、その最大の攻撃が国労に集中した事実は今になってたいへん明確です。中曽根が内閣官房の強化や安全保障室を内閣に設置して、国労、日教組、自治労にたいする攻撃を明らかにしたのが八五年一月です。これは国労をつぶし総評をつぶして抵抗を排除し、一路憲法改悪をして軍国主義国家に持つていく姿がたいへん明確になっていると思います。

### たたかう指導部をつくる

そういうなかで日教組の場合と国労の場合はたいへん似ているのです。国労はローカル線を切り捨てて新幹線に依存させて、その新幹線を民営化させていく。日教組の場合は遅れた子供や弱い子供を切り捨ててエリートを要請する。そのエリートを要請する学校を民営化して第三セクターその他にやらせる。私はいつも、国労と日教組は職場の闘争や力が違う、国労がつぶれたら日教組は三日もたん、したがって国労がたたかっている間にたたかえ、と言っているのです。

私も昨年もいろいろたたかっていますが、日教組総体としては草の根教育運動とか市民運動に手を広げていますが、この間の中央委員会でも、では組織としてどうたたかっているのか、首切りが来た場合どうたたかっているのか、この問題の提起がなかなかできかねています。これはたいへん弱い点です。そこを今私は言っているんです。今から数百万の金を集めて徹底したストライキ体制を組んでいく、日常職場闘争を徹底してやれ。都高教では昨年来たたかってきています。あるいは北海道や福岡の強い組織はたたかっている。何とかこれをやらせようと思っています。日教組のたたかう執行部をつくることに今私は力を注いでいます。たたかわない委員長、書記長はやめてもらう。たたかう執行部をつくらなければいかん。そういう体制に励んでいます。

われわれが国労と交流すると、ひじょうにたたかっていて、たいへんためになる。ただ



反合理化をたたかう。

第三は東京会議にぜひ賛同してこの輪を広げていただきたい。カンパは一口二〇円。そして三月二五日の集会には全力をふるって結集しよう。

こういうことをお願いして、まとめというか私の意見にかえたいと思います。がんばってまいりましょう。(拍手)

## 国鉄「分割・民営化」阻止の条件

——国鉄情勢をめぐる新たな動き——

ハイネは謳う

革命の詩人、民主主義の詩人、あのハイネはこう謳いあげる。

恐れずに太鼓を鳴らせ。

酒保の女に接吻をしろ。

これが学問の全体だ。

これが書物の深い意義だ。

太鼓を鳴らして人々の眠りを覚ませ。

青春の力いっばいに起床太鼓を鳴らせ。

絶え間なく太鼓を鳴らして前進しろ。

これが学問の全体だ。

これがヘーゲルの哲学だ。

これが書物の深い意義だ。

僕はそれらを把握した、何となれば、

僕は賢明だ、僕は勇敢な鼓手だ。

東京会議は太鼓を鳴らし、人々の眠りをさました。「二・二六」は春の雷(いかずら)となり、外界を揺すった。身ぶるいするほど嬉(うれ)しく妖(あや)しの力を注ぎ込んだ。冬が春に変化し、雪が花に変化した。そして、みんなの心は「いま、闘いのとき」と燃えあがった。

パッチはすでに三万個

「国鉄をめぐる情勢は新たな段階に入った。「二・二六」集会、「二・三」田辺質問が切り拓いたのである。

なによりも東京会議の発展だ。「三・二五」集会には一万人を超える人々が集まった。私たちの運動が職場に地域に着実に根つきつつあることを示す。

「連帯」パッチは三万個を超えた。スライドは三五〇本を超え、「安全パンフ」も好評だ。職場・地域の学習会は、木々の芽吹きをしのぐ勢いでふえている。小さな、そして大きな学習会。学習会のたびに、役員・活動家・組合員は水を得た魚のように活気づく。会場をあふれさせた四月二一日の活動家交流集会。二六日には理論シンポジウムを開く。

地域共闘の数も東京で七〇を超えた。そして、全国の組織との連帯、結集もすすんでいる。四月二十七日には「全国交流会」（新宿「セブンシティ」）を、七月一九・二〇日には「全国連絡会」結成集会を予定している。

#### 元気のである学習会が次つぎに

国労の仲間たちの目は輝きだした。三月中旬の国労中央委員会では「国鉄「分割・民営化」は阻止できる」との発言が相次いだ。はじめてのことである。情勢が変化し始めたことを示す。

職場の仲間も負けてはいない。「組合バッチを外せ」「ワッペンを外せ」といったファッショ的な職場専制支配、広域配転、選別を目的とする「職員管理台帳」づくり、「企業人教育」募集といったなかで、目を見張るような抵抗を開始した。

「元気のである学習会」が職場単位で活発だ。学習会にも当局の妨害がある。「分割・民営化反対は国鉄の方針に反する。よって講習室は借せない」と。それでも彼らは「元気のである学習会」をあきらめはしない。国会議員、弁護士、ジャーナリスト、学者とヒザを突き合わせ、「答申」「法案」の本質、問題点を語り合う。「勝つために何をすべきか」を論じ、行動している。

#### マスコミの流れも変化

マスコミの流れも変化した。「答申」「改革」法案は、稀代の悪法だ。第一に足、安全性を略奪する。第二に地域社会を圧殺する。第三に国民一人一四万円、四人家族で五六万円の大増税が襲う。第四に「営業の自由」は中小企業主とそこに働く労働者の生活を不安におとし入れる。第五に国鉄労働者約三〇万、家族をふくめ一〇〇万以上の人びとの生存を否定する。そして、二〇〇兆円をはるかにこえる国鉄資産が一部独占にたどりされる。

土地問題がマスコミに火をつけた。新聞、週刊誌、雑誌、テレビがいつせいに追求を開始した。その典型が三月一日付「朝日」の社説だ。「改革は国民が納得する形で行われなければならない」と、(1)国鉄労働者が新会社に移るとき、いちじるしい不利益をうける可能性があること、(2)国鉄用地の売却問題、(3)新会社の営業範囲、(4)整備新幹線の四つの問題を指摘した。

「心配な国鉄改革法案の行方」と題された三月一日付「読売」の社説は、さらに世論の流れの変化を裏付ける。中曽根の御用新聞が危惧を表明せざるをえなくなった。

こうしたなかで言論人を中心とする市民組織が生まれている。たとえば「市民ネットワーク」「国鉄ウォッチャーグループ」というような。こうした動きは国鉄「分割・民営化」反対の一大国民戦線の結成を予知する。

#### 自民党内にも亀裂拡大

自民党内にも「分割・民営化」をめぐる根深い対立があることが明らかになった。東京会議の国会請願は全国会議員を戸別訪問する。そのなかで明らかとなった情勢だ。「分割・民営化」に全面賛成なのは中曽根派だけ。田中派はほぼ反対、鈴木派、福田派は慎重論との色分けだ。

派閥を問わず顕著な傾向は地方出身代議士に「分割・民営化」を危惧する傾向が強いことだ。選挙の票の行方を心配してのことであろう。だが、これも反撃への材料となる。

永田町はいま「解散風」に揺れている。自民党派閥抗争の幕開けである。すでに自民党内に「分割・民営化に反対する」インフォーマル組織もつくりられているという。



これらは、「分割・民営化」阻止の条件だ。

学び、たたかう

われわれにとつて困難な情勢もある。主体の側の弱さ、そして国会の動きのはやさである。こうした困難を打破する道は大衆運動の高揚をつくることである。そのためのわれわれの努力を幾層倍も強めよう。そして、日々の活動に全力をつくそう。

だが、さまざまな書物を読み、歴史の流れに確信をもつことも必要だ。たとえば、島崎藤村の「夜明け前」、大仏次郎の「天皇の世紀」、山川菊栄の「幕末の水戸藩」等は面白い。歴史のダイナミズムを教え、胸いっぱい勇気を注ぎ込んでくれるからである。

〔東京会議ニュース〕第五号

## 京都総評と革新京都の灯を残すために

——京都府知事選の意味するもの——

京都府知事選は四月六日投票され、「活力京都の会」（自・公・民・新自・社民連）の前副知事荒巻禎一候補が、「民主府政の会」（京都総評、府市民団体、共産党などで構成）の弁護士吉田隆行氏を抑え初当選した。二期八年続いた林田自民党保守府政の継承を許し、革新府政の奪還はならなかった。社会党府本は「活力の会」にはいらず単独で荒巻候補を推薦し、府知事選で初めての保革連合を行なった。

結果は、吉田氏三二六、九三三票、荒巻候補五二七、六七六票。当日の全有権者数は一、八一五、一九八であり、投票率は史上二番目に低い四七・五三％だった。

京都総評は吉田氏を支持

この知事選で特筆すべきことは、左派が主要役員を担う京都総評が、社会党府本の荒巻推薦「満場一致決定」（どこかでよく聞いたセリフだが）にもかかわらず、保革対決の状況下、毅然として、革新・吉田氏支持をしたことである。社会党員である吉田議長、谷内口事務局長は連日声をからして吉田候補の応援にあたり、それを支持する左派の社会党支持単産も、いかなる圧力にも最後までめげることがなかった。

反自民・反独占の旗のもとたたかう京都総評の伝統、ひいては社会党の基本路線は、一時的に誤った京都社会党の決定にもかかわらず、独占資本の意図に反して消し去ることはできなかったのである。

知事選総括——四つのポイント

「八六年政治決戦の動向を占う」と言われた今次知事選の主要なポイントは四つある。  
社会党支持者は健全

第一には、社会党支持者の健全さである。今回の吉田候補にも、四年前の革新・川口候補（このとき社会党は反自民反林田の自主投票）にも、杜共の票がほとんどそのままはいつている。それはそれぞれ真近の衆院選での得票率とピッタリ一致するからだ。八〇年六月衆院選京都一・二区計で、杜共は三三・四三％得票し、八二年四月川口候補は三七・一九％とつている。八三年一二月衆院選でも同じく三五・四三％で、今回吉田候補は三・二六％である。共産党票は当然のこと、社会党票もおさえて、わずかだがそれに上積みさえしている。

直接会ったごく普通の社会党支持者も、「えっ、社会党は荒巻ですか？吉田だと思ってた。社会党は自民党とはいっしょにやらないのが常識でしょう」とか、「新聞で自公民荒巻で共産が吉田というのは私も見ましたが、あれは間違いで、社会党は吉田だと思いましたが」と次つぎに語ってくれ、選挙中だいがこちらが面くらったものである。党そのものより支持者の方が健全だということだ。加えて言えば、それだけ支持者が社会党を見限るということであり、たいへんなツケが今後選挙に回されるだろう。

京都社会党にとって当面する最大の課題は、八三年末に久々に奪還した京都二区の国会議席を確保することだが、現職社公民三名で二議席を争うこととなる。共産党が前回共倒れたため、今度は一人にしほり、当確となるためである。せつかく空家となる革新浮動票を社会党が獲得し、当選ラインに浮上する絶好のチャンスをも、京都社会党は自ら投げ捨ててしまった。

### 共産党主流のセクト主義は変わらず

第二は、共産党主流のセクト主義の誤りも明らかとなり、共産党内外の真に統一戦線を目指す良心的な人々の存在も明らかになってきたことだ。

四月七日付地元紙朝刊でも「特に今回、選挙母体である『民主府政の会』と党の間に足並みの乱れがみられたが、かつてないことであり、今後尾を引く懸念もある」（『京都新聞』）とふれられているが、筆者にも「共産党は何を考えているんだろう」という疑問を投げかけてきた人は数多い。

もちろん「勝てる選挙ではないから、いくら差を縮めるかだ」と言われれば、全体の志気が最初から地に落ちてしまうのは選挙の常道だとしても、参院選と完全にリンクできないと見るやさっと手を抜いてしまった共産党の不見識はセクト主義と言われても仕方ない。

現場に行くと、これが漫画化されてあらわれる。ある社会党の自治体議員が同僚の共産党議員に『京都総評知事選対策委員会ニュース』を持参して知事選の話しを行ったが、いっこう話しさえしてくれない。きわめて冷やかだだった。ある地域で住民運動を社共の党員が中心に進めていて、たまたま吉田候補が代理人となっていたが、共産党メンバーは知事選の絶好の宣伝機会であるこの運動をさぼり、別の運動にのりかえていった。のりかえた先の宣伝ビラには知事選のことは一切のらず、共産党市会議員の名前が出ていた。などなど……。

労戦レベルともかわつての論議も、共産党系労組幹部の間でなされた。勇断をふるった京都総評幹部を最大限激励し、ともにたたかおうとする意見と、これでまた統一労組懇の絶好の宣伝チャンスを失なったとする京教組などの意見である。これが集会のもち方一つでも大論議となった。

これなどはデIMITロフをひもどくまでもなく、直接の集票・選挙技術上からいっても、少数ではあるが前者がまったく正しいことは火を見るより明らかなことだ。敵は「六党対共産」のみを最初から最後まで言って勝ったのだから。

しかし、前回と比べてもきわめて悪条件のもとで、候補者を先頭に吉田陣営はよくたたかった。背景にはさまざまなものがあるが、昨年末三年ぶりに開催にこぎつけた京都総評大会は見逃すことができない。全労協の基本構想批判の常幹団提出原案に反対する右派が流会戦術をとり、「八五年末をもって分裂か安楽死」と言われた京都総評だったが、八単産連名アピールで大会再開が実現できた。その基調は「反自民反独占民主府政の確立と地域労働運動の階級的強化」であった。内三単産が京都総評内「反主流派」の組合だった。前回は今回も、落選が確定して開口一番のあいさつが「改悪公選法下のたたかひのため

負けた」ということだった。だがこれではならぬ総括にならない。もちろん公選法改正は緊急にとりくまねばならない課題ではあるが、改悪公選法下でも「革新ブーム」は起こせる。それは社共の統一をつくりだせばいい。答えは簡単である。そしてそれしかない。低落了した京都の社会党といえ、キャスティング・ボートは握っている。「勝てそうだ」となれば、なだれをうつ現象が起こるのである。

もちろん責任の九割までは京都の社会党にあるが、革新勢力の統一をつくれなかった責任の一端は共産党にある。統一労組懇専従代表委員湯浅晃候補（京教組委員長）を出して敗北した昨夏の京都市長選後、共産党府委員会は一度も社会党府本に話し合いを申し入れなかったのだから。

#### 荒巻候補は自民党・独占資本の手先

第三は、荒巻候補の本質である。はじめから自明のことだが、なんと言っても自民党、独占資本の手先だと言うことだ。当確が定まり、お決まりの万才のテレビを見た人は、だれもが言った。「なんだあれは自民党、財界はっかりじゃないか」。自民党国会議員の司会で始まり、商工会議所のトップと今度自民党の参議院議員に鞍がえする前知事林田がいた。さつして自民党参議院議員が万才するという代物。社会党幹部がそれまで言っていた、「荒巻は嵯川知事時代の総務部長だったから良心的だ」というウソや、「はいっていつて林田色をうすめる」などということがいかにできない相談かは、はっきりしている。

#### 焦点は社会党支持単産の動向

第四は、肝心要のわが社会党と社会党支持単産の問題だ。昨夏の府本大会で「反自民で知事選を闘う」と執行部自ら議案書に書き、「反林田」も入れよとの多くの代議員の声により、「意を体して執行にあたる」と委員長答弁のあった社会党が、支持者に説明もつない、なぜ大会決定違反の推薦を決めたか。

要因は二つだ。一つは来年四月の自分の選挙と今後の議会内の地位保全を考える党府会議員団の利己的な行動。二つには、全民労協京都版の主導権を握らんがための全電通による横車だ。己れの利益のみを考えるこれら二つの勢力に、わが社会党が私物化されたということだ。

今次知事選の焦点は、京都総評傘下四〇単産中、「民主府政の会」に直接参加している俗に言う共産党系単産を除いた二三単産の動向だった。結論は、三分の一ずつ「分解」した。京都総評知事選対策委員会に結集して吉田支持を決める単産。社会党労組選闘にはいつて荒巻支持を決めた単産。自主投票の単産、というふうな。

「今度の選挙は陰湿だ」とよく言われた。「社会党決定」を金科玉条にして、息もつけない雰囲気をつくられた。全電通幹部は京都段階の労組をつぶすために、上部機関である大阪の組織に、当該労組への断りもなく勝手にいくつも訪れた。東京の各労組本部にも何度も圧力をかけさせた。闘争中の単産、候補者を抱える単産など、心ならずも荒巻の推薦状に印を押しした組合もあった。

しかし全電通の一部幹部があれればあせるほど、「三分の一ずつ」の傾向は固まり、いや気をさした自主投票組もふえていった。全電通以外の「右」の労組も、「つきあい」以上のことをすれば次の役選で自らの首が危くなることをよく知っていた。有名な右派民間大単産も、荒巻推薦だけ決めて何もしなかった。その傘下には吉田候補で公然と動く単組がいくつもあった。

全電通は最初荒巻候補の確認団体に直接加盟しなかったが、同盟に蹴られた。「京都総評もまとめられずに一単産などで来るな」と。そこからあせりが始まった。地場の春闘相場に影響力など与えられない全電通としては、せめて社会党を恫喝して支持単産をまとめ

あげること位できなければ、全民労協京都版の主導権などれないからである。それにつけても注目すべきは良心的な単産幹部の「ささやかな抵抗」だ。「いろんなからみがあつてうちの単産は荒巻決めたが、傘下の単組は自己判断だ」とか、「地本では多数でおしきられたが、うちの支部は決めない。分会の独自判断だ」とか、強引に上部機関から押さえつけられ、その労組機関名の推薦状は出されたが、ついに最後までその労組機関の会議は開かなかつたところ。社会党のつくつた推薦状は捨てて、便せんに判読不可能な字で独自の推薦状を送りつけた組合もあつた。みんなどこで何を意志統一した訳でもないのに、皮一枚残して抵抗していた。

決して右派幹部の言いなりにはならない。労働者は、社会党は反自民だ。こういったことが見えてくると、情勢も全く違つて見えてくるものだ。自信もわき、展望が開かれる。

#### 京都総評の灯は消さず

知事選本番を前にした三月一日、京都新聞朝刊は、「全民労協初の地方組織、春闘明け京都に結成」を京都同盟会長談話として発表した。じつは先の二三単産の判断はいつときの知事選を単にしのごにとどまらない、この重大な組織問題を大前提にした「踏み絵」だったのである。だから勢い陰湿化したし、全電通の横車にも拍車がかつた。

京都総評とひいては京都の革新勢力全体に重大な危機が訪れている。

しかし何よりもわが左派の指導部が健在であり、私たちの最大の財産である献身的な活動家が育ちつつあり、真に統一戦線を希求する広範な人たちがいる限り、京都総評は解体させてはならないし、全国にふたたび「革新の灯台」と誇れる日がくるまで、たたかいはやまない。

(京都・A)

### ◇編集部だより◇

▽第二九八号は合併号といたしました。編集部が二週間弱、渡航することになったからです。ご了承ください。

▽編集部は国労闘争に忙殺されています。大衆運動にとびこむことになったからです。大衆運動がこんなにも楽しいものは、想像以上です。

▽その内容は今号の小島忠夫氏の報告がすべてを語ってくれています。編集部も小島氏、そして坂牛氏の報告にあるようにゲリラ戦と正規兵のたたかいをいかに結合するかについて考えさせられています。

▽ただいえることは、客観情勢、主体的条件が大きく流動化しつつある、その事実です。これは私たちがはじめて経験することからです。それだけに不安、とまどいも生まれます。▽それを克服するのが、ケンカ腰の討論です。運動を前進させ、国労闘争を中心とする反「行革」のたたかいかつため、全力をつくし行動し、討論したいものです。

## 連載 『資本論』 第一巻を読む 第23回

## 商品の物神的性格 (二)

第二章第四節(第一一八―第一一九パラグラフ)

商品形態における「とりちがえ」

〔118〕商品の神秘的性質は労働生産物がまさに商品という形態をとることから発生する。人間労働の等一性〔15〕参照は、質的には労働の継続時間に応じていずれの生産物においても同じように価値が形成されるという性質となって各生産物のなかに現われ、したがって量的にみれば労働時間の大小が労働生産物の価値の大小となる。そのことは最終的に交換が実現されることによって、その労働が有用であり、社会的分業の一分肢であったという社会的意味〔24〕参照の確認として表現される。つまり生産者たちの社会的関係が、その労働生産物相互の関係として目に見えるすがたをとるのである。

\* 〔1〕内はパラグラフ番号。〔118〕は岩波文庫第一分冊一三二頁本文冒頭から。

〔119〕そこから商品の神秘的性質は発生するのである。というのは、そのため商品形態が人間労働の社会的性格を、その労働生産物自身のもつ客観的性格のように見せることになるからである。「社会的自然属性」という矛盾した表現が、社会的に与えられたものであるが、あたかもそのものの自然的性質のように見える特殊な現象を表わしている。

したがって社会的総労働の一分肢、つまり社会的分業の一環としての生産という人間の社会的関係さえ、彼らから独立した物同士の結び物の社会的関係、物的関係として見えてしまうのである。こうした「とりちがえ」のために、商品は価値をもつものとなり、超感覚的な意味をもつものとなる。

マルクスはここで「とりちがえ」を説明して、私たちの目になにかが「見える」とはどのようなことか、という例をあげる。すなわちそれは、眼球の奥の網膜にある視神経にたいし、レンズ状の水晶体を通してはいって来た光が刺激を与えるためなのであるが、ところが私たちはそれを目の内部に受けた主観的刺激としてではなく、外部に客観的になにかがあるというように感じるのである。そこには目の内部の主観的現象と目の外部の客観的存在の「とりちがえ」があるのだが、私たち自身はそのことに気がつかない。

もつともこの視神経のばあいには実際に光が存在しており、物理的な関係が存在していることの反映である。それに対し、商品形態における「とりちがえ」は物理的現象ではない。人間がそこに見るのは、人間の特定の社会関係が生む幻影なのである。

これに類似した例は、物理的現象よりもむしろ人間がつくりだした宗教的世界のなかにこそ見つかるであろう。この世界においては、人間の頭が生みだした神々やそのとりまきが、あたかも生命のある実在するもののようにふるまい、人間ともかわりあい、さまざまな神話や伝説をつくりだしているからである。商品の世界においても、人間の生みだした商品が神々と同じように相互に関係し、人間から独立したものに見える。それゆえにマルクスはこの商品形態における「とりちがえ」を、宗教学的用語を利用して「物神礼拝」と名づけたのである。

それは労働生産物が社会的分業と私的生産のもとで商品として生産されるかぎり、必ずついてまわる性質なのである。

(神津 朝夫)